

# 自由意志論における非因果的リバタリアニズムの検討

李 太喜 (Taehee Lee)

所属 東京大学

本発表では、スコット・セホンの両立論的非因果説の立場の検討を通じて、非因果的リバタリアニズム (non-causal libertarianism) と呼ばれる立場の検討・整理を試みる。リバタリアニズム——自由と決定論が両立せず、かつ実際に私たちはしばしば自由に行為すると主張する立場——は、出来事因果的リバタリアニズム、行為者因果的リバタリアニズム、非因果的リバタリアニズム、という3つの立場へと分類されるのが標準的な理解となっている。そして、自然主義的な理解を前提とする傾向の強い分析自由論の中で、因果性とは異なる観点での(自由な)行為理解に基づいて理論構築を行う非因果的リバタリアニズムは、どちらかといえばその傍流にあると言える。

しかし少なくとも一見して、私たちの行為について自然主義的・因果的な理解は、行為の自由と因果的決定論との両立論的見解と親和的であるように思われる。ならば、その自然主義の土俵に上らず、反自然主義的な観点から行為の自由を模索する試みは、リバタリアニズムにとって一定の魅力があると言えるだろう。実際、非因果的リバタリアニズムの理論構築は、カール・ジネ、ヒュー・マッキャン、トマス・ピンク、スチュワート・ゲッツなどによって継続的に行われてきた (Ginet(1990)、Pink(1996)、McCann(1998)、Goetz(2008))。

この非因果的リバタリアニズムに対しては、行為者による行為へのコントロールに関する批判が典型的に与えられてきたが、本発表では近年出版されたスコット・セホンの *Free Will and Action Explanation* (2016) での議論を検討の柱としたい。セホンは、ドナルド・デイヴィッドソン以降の行為論において標準的とされてきた行為の因果説に対し、行為の反因果(非因果)説の旗手の一人として精力的に議論を展開してきた論者である。非因果的リバタリアニズムにとって彼の立場が興味深いのは、この本でセホンが、自由な行為についての非因果的な理解を採りつつ、行為の自由と決定論の両立論を支持していることである。

彼の具体的な議論は、実際の発表で取り上げ検討したい。しかしここでまず確認しておきたいのは、セホンが両立論の立場を支持する根拠を述べる際、行為生起の因果的メカニズムと、自由な行為についての目的論的理解は、無関係である点を強調することである (Sehon (2016) p.131)。つまり、もし行為の自由が因果的なメカニズムとは異なった観点で理解されるのであれば、そもそもある行為が自由であるかの問いを、世界の構造(決定論/非決定論)と関連するものとして扱う必要がなくなる。したがって、行為の自由に関する問いと形而上学的な問いは関連しないという「自由と怒り」におけるピーター・ストローソン流の両立論の立場を採れるのである。

以上の考察から明らかになるのは、行為の因果説、および行為の反因果説は、それぞれの理路から両立論の立場に近づくことになるという点である。翻って非因果的リバ

リアニズムの抱える課題が明らかとなる。それは、行為の非因果説から自然にはリバタリアニズム（非両立論）が帰結しないのであれば、彼らはリバタリアニズムを取る別建ての理屈を提示しなければならないというものである。言い換えれば非因果的リバタリアニズムは、両立論的な非因果説ではなく、非両立論的であらねばならない積極的理由を提示できなければならないのである。さらに、同じリバタリアニズムの別の立場（出来事因果的リバタリアニズム、行為者因果的リバタリアニズム）との違いを明確にするためには、非因果説を採ることと、非両立論を採る積極的理由の間に適切な関連があることを提示する必要もあるだろう。

しかしこれは非因果的リバタリアニズムにとって致命的な問題となりかねない。というのも、えてして非両立論でなければならない理由に、決定論下ではある種の「コントロール」が欠如してしまうことが取り上げられるが、非因果的リバタリアニズムはその立場上、このコントロールを「因果性」の観点から説明することが不可能だからである。したがって非因果的リバタリアニズムは、(因果的) コントロールとは異なった観点から非両立論を採る積極的理由を説明しなければならないという課題を課題を抱えることになる。

本発表では以上のように、セホンの議論を通じて、非因果的リバタリアニズムが抱える問題を整理・検討したい。

#### 参考文献

- Ginet, Carl. (1990) *On Action*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goetz, Stewart. (2008) *Freedom, Teleology, and Evil*. London: T&T Clark.
- McCann, Hugh. (1998) *The Works of Agency: On Human Action, Will and Freedom*. Ithaca: Cornell University Press.
- Pink, Thomas. (1996) *The Psychology of Freedom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sehon, Scott. (2016) *Free Will and Action Explanation: A Non-Causal, Compatibilism Account*. Oxford: Oxford University Press.